

◆活動団体

団体名： NPO法人浜田芸術文化のまちづくり推進協会

連絡先：TEL 0855-25-5789 メール：npohamada_geibun@yahoo.co.jp

URL：

◆活動内容

新たな街道文化創出の事業

- ・インバウンド、海外クルーズ船入港等による観光客受入対策
- ・夢街道ルネサンス・トレイルルート案内立て看板の設置
- ・「浜田城つばきと茶の湯文化」の復活の事業

新たな街道文化創出の事業

- 1 インバウンド、海外クルーズ船入港等による観光客受入対策



イタリア船籍クルーズ船（コスタ・ネオロマンチカ号）前年に続き浜田港へ寄港(2019年7月7日 浜田市においては、市民に呼びかけて歓迎セレモニーの開催や市内に観光案内所を設けて、夢街道ルネサンス・トレイルルートなどの観光案内パンフレット等を配布した。

- 2 夢街道ルネサンス・トレイルルート案内立て看板の設置

(平成29年度事業の未実施分の事業 2019.12.16～18 施工 浜田城西側登城口)



- 3 「浜田城つばきと茶の湯文化」の復活の事業

- ① 武将茶人古田織部と重治（浜田藩開府の祖）織部流・式正茶法による茶会
 （浜田市とNPO法人浜田芸文推進協会共催 於：2019.10.13 浜田城資料館）
 浜田城資料館（御便殿）オープニングイベントとして開催した。



R1年度

② 浜田藩初代藩主・古田重治侯の陶芸活動

古田織部正重然に「武門の茶法」の創始を命じたのは、最近の古文書の新発見から織部流の創始を命じたのは、豊臣秀吉ではなく徳川秀忠と判明したことから、秀忠公が古田織部に命じ、後に古田重治侯に織部流第5世の継承を命じたのではないか。

浜田藩の礎を築いた重治侯は、浜田城の完成を見届けると早々と隠居を申出て、大膳太夫を名乗り江戸に直行し茶の湯の世界に戻っている。

浜田藩初代藩主古田家の菩提寺であった浄土宗「地道山無量院極寺には、徳川秀忠公の恩顧に報いるため、第二代藩主古田重恒侯の奉じた秀忠公の拝墓と金箔厨子入大型位牌が遺る

(東京芝の増上寺以外には、浜田市だけに存在する)。

前述した古田重治侯の経歴から推測すると、伯父古田織部の素養を受け継いだ重治は、浜田城の築城と城下町の整備事業等の傍ら、式正織部流の茶の湯の実践と作陶などに精進していたものと推測される。ところで、一般的には、「山陰地方の陶土は鉄分を含んでいて彩色の美しい茶器の製作には不向きとされてきた。しかし、前述した仮説に従って探究した結果、浜田市域において織部焼に適した美しい陶土が発見された。ここに、苦心の末に「いわみ織部焼」の作陶に成功したのである。



石見織部焼陶土 (浜田市産)



いわみ織部焼茶碗と香炉



ムサシアブミ (浜田場内に群生・関東原産) 千利休と古田織部の子弟 を物語る「ムサシアブミの文」で名高い植物。

③ 浜田城 固有種つばきの由来

〈プロローグ〉

(1) 浜田藩は元和 5(1619)年に、伊勢松阪藩から古田重治侯が入封して開府。江戸時代の初期には城下町として栄えた。第二代将軍徳川秀忠公の世に、秀忠公の花ぐせとして知られる椿から「江戸の椿文化が興り、浜田藩には多くの椿文化が導入された。浜田藩は栄光と挫折をたどりながら、開府から 4 家 18 代 248 年の変遷を辿りながら浜田城は落城した。城も町屋もことごとく灰燼に帰したが、それでも椿は残った。その翌年の慶応 3 (1867)年、幕藩体制は崩壊し大政奉還が行われた。

歴史的には浜田城は、明治維新への道が開かれた地として貴重な私的価値を持つ。更に、地方自治の廃藩置県先駆けとして「浜田県」が全国で初めて設置された。地方自治発祥のちでもある。

(2) 浜田城の炎上によって文化は衰え、椿は衰滅したその種子は城山の斜面に繁殖して残された。その中から自然交配によって白やピンクの変った椿が次々に出来て、浜田の椿は生まれたのである。貴重な歴史的遺産である。(京都大学・生化学研究者 増田耕作著『浜田の椿』)

(3) 浜田城の椿の森はこのままでは滅びる…、何とかして浜田自生椿を守り、かつての「浜田藩政時代の椿文化の復活」を夢見て活動した二人の椿研究家がいた。活動の中核として専門知識を発揮したのが京大学生化学研究者を経て、千葉大学教授、生化学研究者として活躍した増田耕作先生であった。定年退官して浜田に帰郷した先生は、自宅近くの浜田城址を散策中に少種を見つけ、美しさに惹かれ、椿の樹形、葉や花の形容、蕊、花、殖細胞倍数体などの分析・研究、史的背景調査に没頭。そして偶然に園芸家長橋利明氏と出会い、浜田城址の森、周辺の寺社などを歩き、浜田自生椿の新種の発見、分析などに情熱を注いだ。二人は、浜田自生椿の分析・研究資料を以て「日本ツバキ協会」に新品種として登録申請行っていた。

昭 53(1978)年刊号「invitation to Tsubaki 椿への招待」が発刊された。

〃江戸から導入された根拠、

①浜田藩初代藩主古田家菩提寺「浄土宗「極楽寺」に遺る、第二代将軍徳川秀忠公の拝墓、黄金厨子入り大型位牌が遺る。

②秀忠公の格別の恩顧を受けた古田織部と重治侯の時代は「江戸の椿文化」の時期でもあった。

③浜田城の名花の原木が、浜田城域西南の浜田護国神社社務所の西斜面から秋葉神社周辺、夕日ヶ丘出丸跡附近に集中している。この地域は、藩政時代の藩邸と庭園があったところで、昭和の時代には「椿谷」と呼ばれていた。

これに対して、浜田城東北に分布する椿林は藪椿のみで、ここからは変種は生まれない。どこまでも平凡な藪椿である。なお、旧城下町には浜田藩侯との由緒ある寺社に名花の原木が確認されている。



浜田城自生椿の名花

<日本ツバキ・サザンカ名鑑登録品種>

日本ツバキ協会 推薦品種 ○ 准推薦品種 ○

無音の雪



掬水



再の鴝



森の星



郎女(いらつめ)



石見揺籠



銀鐘



渡代の桜



善那



亀山の雪



花霞 (花がすみ)



白舎

<浜田自生椿 (未登録品種) >



依羅娘子(よさみのおとめ)



紅蜻蛉(べにあきつ)



揺籠 (ゆりかご)



小結



武蔵鐙 (むさしあぶみ)

武蔵鐙は、関東原産のサトイモ科の多年草で、浜田城南西側斜面に大群落がある。浜田藩と茶の湯の縁を感じる。

千利休と古田織部の師弟愛として知られる「武蔵鐙の文」は、豊臣秀吉の関東征伐に従軍して、小田原の陣にあった千利休と、関東を転戦中の古田織部の書簡の交換である。織部が発した「武蔵鐙の歌」に対する千利休の「返し歌」のこと。